

移と主体とする一元論的解釈のみでは不十分で、基底層、機能層両者の相互推移関係より二元論的に考える事が妥当の如く思考される。

107. (演) 子宮頸管粘液に関する実験的研究

(東京女子医大) 川上 博, 大内 広子
相羽早百合, 井口登美子, 高橋 文子
遠藤 雅子, 中川 博子

我々の教室では従来子宮頸管粘液の性状について研究を行っており、粘液中の種々の成分が性ホルモンの支配下に月経周期に伴った周期的変化をきたすことを明らかにしつつある。しかしながらその分泌機構の詳細はいまだ解明されていない。そこで我々は実験的取り扱いの比較的容易である家兎を選び、子宮頸管における分泌動態の研究を試みた。更に今回の実験は、人および家兎について種々スルファ剤を投与し、その場合における頸管粘液への移行状態および、細菌の検索をおこなった。スルファ剤の分析方法は、採取された頸管粘液は秤量し、同時に採血された一定量の血清をそれぞれ除蛋白の後、Bratton Marschal 法により比色分析を行った。

108. (演) 白鼠腔壁の電子顕微鏡的研究

(関西医大) 水野潤二, 樫木 勇, 王 秋雲

吾々は今迄に人及び白鼠子宮内膜上皮細胞、白鼠乳腺細胞、人及び白鼠黄体細胞を電子顕微鏡で観察し、以つて細胞の超微細構造と機能殊に分泌機能との関係を研究して来た。今回は更に一定の内分泌支配により秩序正しく周期的に増殖、剝脱の変化を繰返している白鼠腔壁を電子顕微鏡で観察した。

即ち静止期には基底細胞、多角上皮細胞、円柱上皮細胞よりなり、細胞質は一般に暗調で殊に表層近くでは細胞質全体が著しく暗く見られ、その表面には Microvilli 様の突起が認められる。細胞質内微細構造は比較的豊富である。

発情期には更に角代細胞が加わるが一般に細胞質は鬆粗で細胞間質も著しく拡大している。細胞質内微細構造物も豊富に認められる。

これら各型細胞の周期的変化、去勢及び各種ホルモンの影響について観察し併せて発癌過程に付いても検討中である。

109. (演) 産婦人科領域に於ける電子顕微鏡的形態学 (第15報)

一家兎及び人卵管上皮細胞の微細構造—

(札幌医大) *橋本正淑, 森 和郷

下山利雄, 河崎 功, 香坂三男
明石勝英

成熟雌家兎耳静脈に妊娠3カ月妊婦原尿5ccを注射して排卵を惹起せしめ、48時間後に開腹して卵管を剔出、峽部、膨大部及び采部に分けて包埋、之を発情前期成熟家兎卵管上皮細胞との間の微細構造の変化を比較検討した。一方胎生5カ月、7カ月、8カ月の人胎児卵管、成熟婦人卵管期、黄体期、月経期、妊娠3カ月婦人、老年期婦人(閉経後5年以上)の各卵管上皮細胞につき系統的な比較観察を行った。家兎発情前期及び排卵後卵管上皮の分泌細胞に於ては分泌顆粒の大きさ、形態、density等の変化を中心として、Golgi野及びendoplasmic reticulumの消長の上で明瞭な移行関係が見られ、之は峽部分泌細胞に於て顕著である。采部上皮に於ては分泌顆粒を含まない無纖毛細胞とも称すべき峽部分泌細胞とは性格を異にする細胞群が認められ、采部上皮は分泌機構に於て峽部と異なる態度を示すことを知った。同様な事が成熟婦人卵管の各部分に於て見出される。

人胎児卵管に於ては胎生5カ月に於て既に纖毛基底小体を有する細胞が認められ、7カ月に於て基底小体より細胞質内に深く延びる2条の約500Åの周期性条紋構造を見る。此の時、峽部分泌細胞の分泌機能が開始せられると思われる所見が得られた。采部上皮は成熟婦人無纖毛細胞と類似の構造を示す。妊娠期卵管分泌細胞に於てはendoplasmic reticulumの拡大及びmitochondriaの膨化が著明で、老年期卵管に於ては纖毛細胞は殆んど観察されず、峽部采部共無纖毛細胞類似の細胞で占められ、時に脂肪顆粒の出現がある。

110. (演) 卵管分泌液の生化学的研究

(福島医大) 貴家寛而, 秋山精治
山崎一男

受精卵が卵管を通過し子宮内に着床するまでに要する期間は動物の種類によつて異り人間では少くとも3~4日以上、兎では70時間であるといわれているがこの期間中に卵と卵管との間でいかなる物質代謝が営まれるかということは極めて興味ある問題である。そのうち卵管の組織化学的研究は幾多報告されて来たが、直接卵の栄養源になるであろうと考えられる卵管分泌液についての研究はほとんどその報告を見ない。そこで論者は家兎卵管分泌液について生化学的な検索を行った。

試料を凍結乾燥して集積しその溶液で卵管液、腹水、血清について総蛋白、Sialic acid及び結合糖をGlucose